八重瀬をつなぐ原点

【第一章】

響け大地の活力

肥沃な大地に恵まれた八重瀬町は、昔から農業を基本に発展してきました。現在も農業を主軸にしたまちづくりを展開しています。

太陽の光をいっぱいに浴びた彩り鮮やかな農産物が数多く栽培され、地元産を使用した特産品の開発も積極的に行われています。また、生産と消費と販売をつなぐ地産地消の取り組みも活発に行われています。

町内唯一の漁業集落、港川では、新鮮な魚介類が水揚げされ、競り売りではうみんちゅたちの活気ある声が飛び交っています。

八重瀬町は、海と大地の活力があふれる産業の舞台。今日も豊かな恵みが生まれています。

まちは産業の舞台

サトウキビ作りに励む神谷福方さん(右)と神谷清一さん

舞台1 農業

良質なサトウキビ作りに励む生産農家

長年暮らしを支えてきたサトウキビこれからも変わらずひた向きに

町

内のいたるところでキビ畑が見られるように、サトウキビは耕種部門で作付け面積が最も大きい農産物です。昭和三十年頃から盛んに行われ、農業が主体の八重瀬町にとって、長年人々の暮らしを支えてきました。

神谷福方さんと神谷清一さんの一家も、それぞれサトウキビで生計を立ててきました。現在は、それぞれのキビ畑でサトウキビ作りに励む生産農家です。機械化が進む中でも、収穫はすべて手作業。日曜日になると家族総出でキビ刈りを行っています。二人の栽培には、工夫とこだわりが細かいところに見られます。品種選びにも土壌との適正や風害への耐久性を考え、早熟度や糖度など色々な視点から研究しています。また、季節を問わず、肥料入れから夏場の水やり、枯葉とりなど丁寧な肥培管理も欠かしません。このような努力の甲斐もあって、優良な生産農家に贈られる農林水産大臣賞を受賞したこともありました。

近年、サトウキビ産業について現存の制度が廃止され、市場の需給を反映した取引価格が形成される制度に移行し、新たな経営安定対策が実施されます。サトウキビ産業の法人化も求められるなか、小規模農家が大部分を占める本町にとって不安を感じる農家も少なくありません。しかし、「制度が変わっても、これまでのサトウキビ作りは続けていきたい。」と二人はひた向きな姿勢を見せました。